

St. Luke's International University Repository

Practice Report : Accelerated Bachelor of Science in Nursing Program at St. Luke' s International University: Outline and Challenges of Type 2 Integrated Subjects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 縄, 秀志, 佐居, 由美, 樋勝, 彩子, 下田, 佳奈, 川端, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/13165

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



実践報告：聖路加国際大学第3年次学士編入制度

—統合科目②の概要と課題—

繩 秀志¹⁾ 佐居 由美¹⁾ 樋勝 彩子¹⁾ 下田 佳奈¹⁾ 川端 愛¹⁾

Practice Report : Accelerated Bachelor of Science in Nursing Program at St. Luke's International University: Outline and Challenges of Type 2 Integrated Subjects

Hideshi NAWA¹⁾ Yumi SAKYO¹⁾ Ayako HIKATU¹⁾ Kana SHIMODA¹⁾ Ai KAWABATA¹⁾

[Abstract]

From 2017, St. Luke's International University has begun to offer the Accelerated Bachelor of Science in Nursing Program to applicants with a bachelor's degree in another discipline. This is the first course in the country to do so. A specialized curriculum consisting of three Type One Integrated Subjects—Functional Morphology Studies (3cp), Theory and Method of Health Assessment (2cp), and Functional Morphology Practical (2cp)—must be studied over five months (April to August), totaling 7 credit points. Six Type Two Integrated Subjects—People-Centered Care Nursing (PCCN) (3cp), Development of Nursing Theory, (2cp), Fundamental Nursing Skill Theory I (2cp), Fundamental Nursing Skill Theory II (2cp), Communication Practical (1cp), and Fundamental Nursing Skill Practical (1cp), totaling 10cp, as well as Nursing Development Theory Practical (2cp) have been developed.

In this paper, we outline how classes for the six Type Two integrated subjects (totaling 10cp) and Nursing Development Theory Practical (2cp) developed over a short five-months period and how learning from the lectures, tutorials, and practical sessions was integrated. The report is on the realities, the ingenuity, and future issues.

[Key words] graduate entry, university education, nursing education, fundamentals of nursing, integrated curriculum

[要 旨]

平成29年度より、聖路加国際大学は、看護学以外の学士号を取得した者を対象とした第3年次学士編入制度を開始した。これは、全国で初めての取り組みである。従来の4年制でのカリキュラムでは、2年間かけて学ぶ10科目19単位を5カ月間（4-8月）で学ぶ必要がある。そこで、形態機能学（3単位）、ヘルスアセスメント方法論（2単位）、形態機能学演習（2単位）の3科目7単位を統合①とし、People-Centered Care Nursing (PCCN) 論（3単位）、看護展開論（2単位）、基礎看護技術論Ⅰ（2単位）、基礎看護技術論Ⅱ（2単位）、コミュニケーション実習（1単位）、基礎看護技術実習（1単位）の6科目10単位を統合②とし、最後に看護展開論実習（2単位）を展開する特別なカリキュラムを導入した。

本稿では、統合②6科目10単位と看護展開論実習2単位の授業を5カ月間の短期間にどのように展開し、講義・演習・実習の学びをどのように統合したのか、その実際と今後の課題について報告する。

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science

【キーワード】 学士編入, 大学教育, 看護教育, 基礎看護学, 統合カリキュラム

I. はじめに

平成29年度より, 聖路加国際大学は, 看護学以外の学士号を取得した者を対象とした第3年次学士編入制度を開始した。これは, 全国で初めての取り組みである。

従来の4年制でのカリキュラムでは, 基礎看護学・看護技術学領域の科目については, 1年前期から2年後期までの2年間かけて学ぶ10科目19単位を第3年次学士編入初年度の5カ月間(4-8月)で学ぶ必要がある。そのために, 形態機能学(3単位), ヘルスアセスメント方法論(2単位), 形態機能学演習(2単位)の3科目7単位を統合①とし, People-Centered Care Nursing (PCCN)論(3単位), 看護展開論(2単位), 基礎看護技術論Ⅰ(1単位), 基礎看護技術論Ⅱ(2単位), コミュニケーション実習(1単位), 基礎看護技術実習(1単位)の6科目10単位を統合②とし, 最後に看護展開論実習(2単位)を展開する特別なカリキュラムを導入した。

本稿では, 統合②6科目10単位と看護展開論実習2単位の授業を5カ月間の短期間にどのように展開し, 講義・演習・実習の学びをどのように統合したのか, その実際と工夫点, および今後の課題について報告する。

II. 統合②から看護展開論実習までのカリキュラムの特徴

1. 科目の順序性

統合②の6科目10単位の概要を表1に示す。各科目には, 各シラバスがあり, 科目としては独立している。しかし, 従来2年間で学習する内容を5カ月間で集中的に学習するため, 科目の順序性・関連性を重視し, 系統的に配置し, 学習内容が連続性の中で有機的に統合できるようにした。

PCCN論で看護・看護学の基本を学びながらコミュニケーション実習で入院患者とのコミュニケーション体験を通して援助関係について学ぶ。看護展開論では看護の実践方法としての看護過程と基礎看護技術論Ⅰで日常生

表1 統合②と展開論実習の科目内容と順序性

科目名(単位数)	内容
PCCN論(3)	看護・看護学の基盤
コミュニケーション実習(1)	コミュニケーションの概念 スキル演習, 病棟実習
看護展開論(2)	看護者としての基本姿勢 系統的思考過程(看護過程)
基礎看護技術論Ⅰ(2)	日常生活援助技術
基礎看護技術実習(1)	シミュレーション演習, 病棟実習看護
基礎看護技術論Ⅱ(1)	診療補助関連技術(与薬, 検査)
展開論実習(2)	看護過程を用いた看護実践

活援助技術を学びながら基礎看護技術実習で入院患者への看護技術の体験を通して看護技術の安全・安楽について学ぶ。看護技術論Ⅱでは診療補助関連技術を学び, 今までに学んだ知識と技術を統合し, 看護展開論実習で受け持ち患者への看護実践を看護過程に沿って展開し, 看護および今後の課題について熟考する。

このように, 科目の順序性に意味があり, 学びを積み立てながら次に生かす, 前の学びが今の学びに直結し, 理解が深まるように配置した。

2. 連続性の中での有機的に学べる工夫

1) 同一事例を複数科目で活用

短期間で講義・演習・実習が連続して展開されるメリットの一つに, 学生の実習病棟が早期に決定し, 実習病棟を考慮したPaper patient事例の活用が可能になることが挙げられる。

その1例を紹介する(図1)。整形外科病棟で実習する学生は, 看護展開論の演習では, 大腿骨骨折のPaper patient事例Aさんを教材に, Aさんの看護過程の展開(情報整理→解釈→看護問題の明確化→看護計画の立案→評価のプロセス)についてグループワークを通して学ぶ。更に, 看護展開論実習の準備演習では, Aさんを担当した場合の自分の1日の行動計画を作成し, 病棟実習を具体的にイメージできるようにして, 病棟実習に臨んだ。

2) 体験を活かしたアクティブ・ラーニング

また, 2つ目のメリットは, 講義・演習・実習が集中的に展開されるので, 実習での体験を活かしたアクティブ・ラーニングが展開できることである。

その1例を紹介する(図2)。コミュニケーションの病棟実習で困難に感じた事例についてのロールプレイをグループ学習で実施し, 病いを抱えた患者の思いを知り, 看護実践におけるKnowing the patientのためのコミュニケーションスキルを高めることに繋げている。

同一事例を複数科目で活用

～学生が実習で担当する患者を想定した事例の活用～
整形外科疾患(大腿骨骨折)のAさん事例

科目名	事例活用内容
看護展開論 [講義&演習]	Aさんの「看護過程を展開」 情報整理→解釈→看護問題の明確化→ 看護計画の立案→評価→計画の修正
看護展開論実習 [準備演習]	Aさんの「1日の行動計画作成」 実習時間(7:30~15:00)の行動計画作成

【看護展開論実習(2単位)】整形外科病棟で実習

図1 連続性の中で系統的に学べる工夫①

現場での体験を活かしたアクティブ・ラーニングを展開

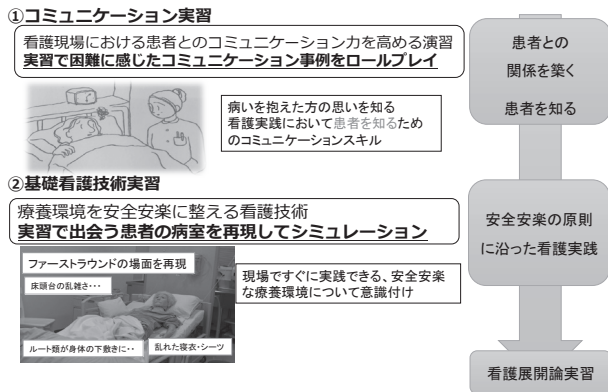


図2 連続性の中で系統的に学べる工夫②

また、基礎看護技術実習の準備演習では、ファーストラウンドで出会う患者の病室を再現したシミュレーション学習で、看護実践にすぐに活用できる療養環境を安全・安楽に整える看護技術を学び、学んだ内容を実習の中で活かすことに繋げている。

2. 短期間にハイペースで学ぶことの難しさと工夫

1) 個人ワークの学習時間を確保する

看護展開論は、看護過程の基本を理解し、事例を用いてグループで情報整理→解釈→看護問題の明確化→看護計画の立案→評価のプロセスを学ぶ科目であるが、15コマを3日（5コマ/日）で実施した。個人ワークをする時間の確保と学んだ内容が定着・熟成しないままに3日間が過ぎてしまい、展開論実習に臨むことになってしまった。

そのために工夫した点は、看護展開論実習では、思考を整理する時間を十分確保するプログラムを作成した。1週目の病棟実習は午前中とし、午後はカンファレンスと個人ワークとしての記録作成の時間にあてた。また、CNE（クリニカル・ナースエデュケーター）と学部実習担当者との協働のもとに学生指導を実施した。

また、基礎看護技術論 I は、講義、自己学習、演習をセットにして実施した。看護技術の手順・根拠を理解した上で各技術の演習を実施したが、学生は1日（5コマ/日）毎に異なる看護技術の習得に追われてしまい、反復練習をしながら技術を身に付ける時間の確保ができなかった。

そのために工夫した点は、演習での教員数を増やすことで少人数指導体制を整え、学内のみで使用できていた基礎看護技術 WEB 教材の学外使用を試みた。また、看護展開論実習のための準備演習として3日間確保し、実習前と実習中の実習室助手による自己学習支援、実習中の CNE、病棟スタッフ、学部実習担当者との協働により、実践経験の中で看護技術力を高めることを目指して学生指導を実施した。

2) グループワークを通して互いの学びの共有

統合②の講義・演習・実習の授業時間の約5割でグループワーク学習を実施している。例えば、コミュニケーション実習や看護展開論実習では、看護体験を語ることにより看護の意味や価値を発見でき、メンバーがお互いの語りに関心を向けることで相互作用が生み出され、新たな発見や価値が生み出されるナラティブが有用である。

多くのグループワークを通じて、学生は互いの学びを共有しながら看護共同体として成長していく。30人クラスであるからこそ、できる方法なのかもしれない。

3) 看護展開論実習を経て次のステップへ

看護展開論実習は、1名の入院患者を受け持ち、患者との援助関係を築きながら、看護過程を用いて患者の健康課題の解決を目指し、安全、安楽、個性のある看護ケアを実践しながら病の体験を理解し、看護の価値・意味を発見する実習である。

もう一つ重要なことは、この実習での学びを専門領域の実習に繋げることであり、そのために、最終日に自分の実習体験を通して発見した看護の価値・意味とともに今後に向けての展望を語り合うグループワークを設定している。この場には、学生と教員のみならず、実習病棟の CNE や実習指導者等も参加している。

Ⅲ. 統合②の課題と対策

1. 科目の順序性から内容の統合へ

看護展開論の15コマを3日間の集中講義で行い、学生は、看護過程の枠組みの理解から事例を用いた展開までに取り組んだ。4年制のカリキュラムでは、対象を捉える視点を1年生の科目である程度学んだ上で2年前期に学ぶ内容であり、対象の理解から健康問題を見極め、解決に向けてどのように看護を展開していくのかを考える科目である。したがって、学士編入の学生にとっては、対象を捉える視点も学びの途中であり、看護過程の枠組みとしての新しい知識を具体的な事例に応用していくことは非常に難しかったと言わざるを得ない。われわれも授業を実施して、学生の反応を見て、内容と方法の変更が必要であることを痛感した。

そのための対策としては、以下の点を考えている。

1) 対象理解と看護問題の理解を促進するために、対象のからだと生活を理解する統合①に繋げた看護展開論の講義を入れる。例えば、“動く”について統合①でからだと生活、病気の視点で対象を理解する講義の後に、“動く”ことに問題のある事例を用いて、アセスメントし、看護問題を同定する。

2) 看護問題に対して、どのような看護が必要であるかを考えるために、①の看護展開論の講義の後に、“動く”についての看護技術を学ぶ基礎看護技術論 I を繋げ

る。

以上を通して、「動く」ことに問題のある事例を用いて、アセスメントし、対象を理解し、看護問題を同定し、必要な看護を考え、看護計画を立案し、実施の演習までのプログラムが完成すると考えた。

現在、来年度のカリキュラムを検討しているが、統合②の内容を科目ごとではなく、「生活行動」のテーマごとに統合①と繋げることで、学生の知識の定着と統合ができ、学びを促進できるのではないかと考えている。

このように考えてみると、看護展開論は、看護を実践するうえでの枠組みであり、対象を理解する知識・技術としての統合①と、対象を理解した上で、どのような看護が必要かを考える知識・技術としての基礎看護技術論Ⅰとを統合したカリキュラムをつくることは、必然であると言えよう。

また、「生活行動」のテーマごとに授業が展開されると、看護展開論や基礎看護技術論Ⅰの内容が4カ月の中に配分されるために、学生は、次から次に新しいことに追われるストレスも軽減できると考える。

学習意欲と目標達成への意欲の高い学生の看護実践力の基盤となる臨床判断能力を高めるためにも、積極的なカリキュラム改正をすることがわれわれの使命である。

2. 3つの実習のさらなる工夫

看護コミュニケーション実習、基礎看護技術実習、看護展開論実習での学生の学びは充実していた。講義や演習で学んでいることが直ぐに臨床における実践の学びに結びつくこと、学士編入生の特徴である今までの社会的スキル、学習意欲・目標達成意欲の高さ、批判的思考力を最大に活用することの相乗効果として、実践での看護体験の積み重ねができていた。

ただし、短期間に3つの実習が展開されるので、もし実習を4/5欠席すると留年になってしまうため、追実習を組めるような病院との調整やカリキュラムの検討が今後の課題である。

3. 限りのある資源を有効に活用

学部100名の学生と学士編入生30名が同時に学習することは、特に学内演習で使用する実習室の問題は深刻であった。元来、学生の主体的な自己学習を促進してきた聖路加文化は、学生が自由時間を活用して実習室での技術の練習が日常的に盛んに行われていた。

しかし、学部コースと学士編入生コースがそれぞれ同時に進められるため、実習室の使用が重なり、学生からも演習環境を整えてほしいという要望が挙がった。

そこで、今年度から新たな実習室・ベッドの確保に向けて検討が始められ、来年度には学生が自由に技術練習をすることができる環境を整える準備が始まっている。

もう一つは、教員のマンパワーについてである。基礎看護学として担当している従来の学部の前期12単位に加え、学士編入の前期10科目19単位が加わり、合計31単位を担当することは、かなりの負荷になってくる。1日に4～5コマの授業を連日同じ教員が担当することは、教員の負担が大きいばかりではなく、学生にとっても負担は大きく、教育の質の低下にもつながりかねない。

4月から学士編入の専任教員として3名の助教が入職し、授業・演習の準備や補佐、演習・実習の指導等を担ってもらうことで、どうにかカリキュラムを運用できたと考える。しかし、統合②の科目責任者である教授1名は4月に入職してきたため、十分な準備をしてから授業を展開するというよりも、授業の準備と授業に追われる日々を繰り返すことになってしまった。学士編入の専任教員や基礎看護学の教員のみならず、看護の機能領域の教員にも協力を仰ぎ、協働して取り組まない限り、教育の質を高めることは難しいと考える。教員のマンパワーをどのように効果的に活用していくのが大きな課題である。

IV. まとめ

新しいカリキュラムでの授業を前期に終えた学生は、今、後期の専門領域の実習に取り組んでいる。前期の学びが活かされ、確実に看護実践力を磨いている様子に頼もしさを感じる。

新たな試みは、今までの当たり前を碎き、新たな内容を創り上げるための苦しみを伴う体験であるが、その体験を振り返り、言葉にして語ることで、価値や意味を見つけることができる。

本報告を通して、統合②のカリキュラムとしての価値を再度確認することができ、今後どのように課題に対処すべきかを考えることができた。社会人経験をした上で看護学を修めようと決意して入学してきた学生にとって、看護実践能力の基盤となる知識や技術、人間力を養うための教育を更に発展させることが、ここに関わる教員としての使命であると思う。

学士編入生の特徴である社会的スキルの高さ、学習意欲・目標達成意欲の高さ、批判的思考力の高さを強みとして活かしながら、患者や家族と共にその人らしく生きることを模索しながら、看護の意味・価値を発見し、自らの看護観を育んでいけるような看護教育を探求していきたいと思う。